

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和2年度 注意報第3号(普通期水稻のトビイロウンカ)について (送付)

本年はトビイロウンカの飛来量が多く、これまでに技術情報第12号(8月12日付け)等で適期防除を呼び掛けてきました。しかし、8月17～21日の巡回調査において、発生密度が一部のほ場で高まっているのが確認されました。

つきましては、本情報を基にトビイロウンカの適切な防除を行うとともに、防除後も本虫の発生動向には十分注意してください。

なお、本情報は、病害虫防除所ホームページ (www.jppn.ne.jp/kagoshima) にも掲載しています。



病害虫発生予察 注意報第3号

- 対象作物 普通期水稻
- 対象病害虫 トビイロウンカ
- 発生地域 普通期水稻栽培地帯
- 発生量 やや多

5 注意報発令の根拠

- 8月下旬の巡回調査(調査ほ場数62)において、発生密度の高いほ場が確認された(表1)。
- 育苗施用剤を用いたトビイロウンカに対する防除試験において、8月13日(田植70日後)の調査では、トリフルメゾピリム含有箱粒剤の1株当たり虫数が1頭に対して、ピメトロジン含有箱粒剤が31頭、無処理では52頭であった(図1)。使用する育苗施用剤の種類によって、トビイロウンカに対する防除効果に大きな差が認められる。
- 九州南部における向こう1か月の気温は平年に比べて高いと予想され、今後も、トビイロウンカの増殖に好適な状況が続くことから、本虫の密度増加及び坪枯れ被害の発生が懸念される。

6 防除対策及び防除上注意すべき事項

- (1) トビイロウンカは急激に生息密度が高くなることがあるので、ウンカ類に効果が高いトリフルメゾピリム剤の育苗箱施用剤を使用しているほ場でも、発生に十分注意する。
- (2) 中～晩生品種は収穫期までの期間が長く、坪枯れ被害を生じる危険性が高いことから、特に注意する。9月以降に出穂期を迎える中～晩生品種は、出穂期以降の斑点米カメムシ類の防除の際にトビイロウンカにも効果のある薬剤を選定し、効率的な防除に努める。
- (3) ほ場内の生息分布にはムラがあるので、ほ場全体の発生状況を必ず確認する。本虫は稲の株元に生息するので、粉剤や液剤で防除する場合は、薬剤が株元に十分届くように散布する。
- (4) 薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守し、薬剤の飛散防止に努める。

表1 巡回調査におけるトビイロウンカの発生状況（調査日：8月17～21日）

地域名	調査ほ場数	程度別発生ほ場率（％）				
		甚	多	中	少	無
南 薩	10	0	0	10	40	50
北薩平坦	24	4	0	0	33	63
北薩山間	22	0	0	0	50	50
大 隅	6	33	0	0	0	67
県計（平均）	62	8	0	1	33	58

※ 程度別発生基準

発生程度	甚	多	中	少	無
払い落とし株当たり虫数(頭)	51以上	21～50	6～20	1～5	0

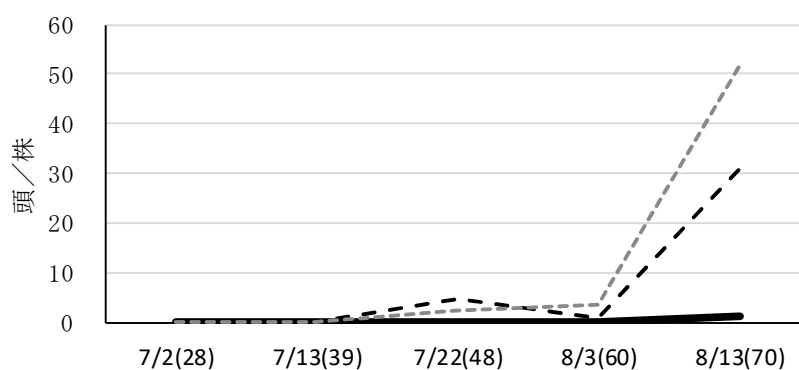


図1 トビイロウンカに対する箱施用剤の防除効果

—— トリフルメゾピリム含有箱粒剤 - - - ビメトジン含有箱粒剤 - - - - 無処理

注1) 試験場所：農業開発総合センター生産環境部水田 注2) 田植日：6月4日

注3) () は田植後の日数を示す。注4) 供試品種：‘あきほなみ’



図2 トビイロウンカ雌成虫 (左：長翅型 右：短翅型)



図3 トビイロウンカの多発株



図4 トビイロウンカによる被害の初期症状